

ハーンのセンセーショナルリズム

—— “Tan-Yard Murder Story” まで ——

Lafcadio Hearn's Sensationalism: In the Early Articles of the *Cincinnati Enquirer*

木田 悟史
(Satoshi Kida)

はじめに

ピッチフォークで頭部を殴打されたのちに炉で燃やされたむごたらしい死体の描写が鮮烈な“Tan-Yard Murder Story”は、*Cincinnati Enquirer*の若手記者だったラフカディオ・ハーンの名を一躍高めた記事であり、伝記作家や研究者によってもたびたび言及されてきた。数編のアンソロジーを参考にして掲載順に整理してみると、“Tan-Yard Murder Story”の前後に同系統の記事がいくつか見当たり、当時のハーンが「センセーショナルリズム」を売りにしていたことがわかる。

ハーンのシンシナティ時代は日本時代に比べるとまだまだ不明な点が多い。*Enquirer*に書いた記事にしても、数は膨大だが、そのいくつかは単行本未収録である。したがって、本稿の議論も暫定的なものにならざるを得ないが、今回はひとまず、アルバート・モーデルと西崎一郎とジョン・クリストファー・ヒューズがそれぞれに編集したアンソロジーを参考に、一応のデビュー作から“Tan-Yard Murder Story”までの範囲内でハーンのセンセーショナルリズムの性質を論じ、より詳細な研究への端緒としたい。

I *Cincinnati Enquirer* 紙掲載の記事

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) は 1869 年、19 歳のときに米国オ

ハイオ州シンシナティに移民した。¹ 職を転々とする貧しい生活を余儀なくされながらも文筆修行に励み、週刊誌に投稿を続けた。² 1872年、地元紙 *Cincinnati Enquirer* (以後 *Enquirer*) に持ち込んだ原稿によって実力が認められ、以降 1875年に退社するまで同紙の主力記者の一人として活躍した。

今回、ハーンのシンシナティでの仕事を論じるにあたって利用した文献は、アルバート・モーデル (Albert Mordell) と西崎一郎とジョン・クリストファー・ヒューズ (John Christopher Hughes) がそれぞれに編纂した作品集である。

モーデルはフィラデルフィアの法律家であったが、熱烈なハーン愛好家でもあり、1924年に *An American Miscellany* 全2巻を、翌年には *Occidental Gleanings* 全2巻を出版した。³ いずれも、ハーンがシンシナティとニューオーリンズで書いた記事を集めたアンソロジーの先駆けであり、以後のハーン研究に大きな貢献をした。*An American Miscellany* 第1巻の“Introduction”で本人が明らかにしているように、モーデルは他の作品との照応に加え、関係者による伝記や手紙なども照らし合わせることにより、無署名で埋もれていたハーンの記事を次々と発掘した。

西崎一郎はモーデルが収録しなかった記事を集め、1939年に5冊のアンソロジーにまとめた。*Barbarous Barbers and Other Stories, Buying Christmas Toys and Other Essays, Literary Essays, The New Radiance and Other Scientific Sketches, Oriental Articles* がそれである。ジョン・クリストファー・ヒューズ編の *Period of the Gruesome* は最も新しく、1990年の出版である。これはシンシナティ時代に絞ったアンソロジーであり、1872年から1878年までの間にハーンが *Enquirer* と *Cincinnati Commercial* に書いた記事の中から51編を選び出している。

本稿が主に議論の対象とするのは、三人のアンソロジーに収録されている記事のうち、1874年11月9日に *Enquirer* に掲載された“Violent Cremation”、通称“Tan-Yard Murder Story”として知られている記事までである。⁴ ハーンはこの記事が売れたおかげで、「センセーショナル・レポーター」として一躍名を高めた。後述するように、その理由は凄惨な焼死体の報道が受けたからで

あるが、ハーンはそこで突然センセーショナリズムに舵を切ったわけではなく、それ以前にも同様の嗜好を見せており、一つの作風として確立していた。今回は上記のアンソロジーの範囲内に限られるが、“Tan-Yard Murder Story”に至るまでの記事も視野に入れることにより、当時のハーン流のセンセーショナリズムについて論じたい。

該当する記事を抜き出して発表順に並べ直すと、始まりは1872年11月24日、テニスンの新作の書評“Idyls of the King”となる。⁵この他にも、論説的な記事としては、“The Golden Balls”(1873年11月9日)、“The Midnight Mission”(1874年2月1日)、“Shall we Burn or Bury?”(1874年3月1日)、“Patronage”(1874年5月17日)などがある。続いて、インタビュー形式の記事としては、“Modern Spiritualism”(1874年1月4日)、“Mr. Handy’s Life”(1874年1月25日)、“Slow Starvation”(1874年2月15日)、“Barbarous Barbers”(1874年3月8日)などが挙げられる。“Ancient and Modern British Amusement”(1873年11月2日)や“Wonders of Assassination”(1873年12月14日)、“The Cedar Closet”(1874年3月1日)のように、新聞記事というよりも、エッセイ・物語に接近したものもあり、駆け出しながらすでに複数の執筆スタイルを使い分けていたことがわかる。⁶

II センセーショナル・レポーター

しかし、この時期のハーンの記事としての本領は何よりも「センセーショナリズム」にあった。標準的な伝記である『評伝ラフカディオ・ハーン』の著者E・スティーヴンソンは、“Tan-Yard Murder Story”に触れてこう述べている。「この皮革製作所殺人事件のために、『インクワアラー』の発行部数は飛躍的に増大した。以前からその傾向はあったが、ここにおいてははっきりと、ハーンは『インクワアラー』きってのセンセーショナル・レポーターという役割を認められた」(74)⁷。では、“Tan-Yard Murder Story”で最高潮に達するハーンの「センセーショナリズム」とは具体的にどのようなものだったのか。

1874年10月4日掲載の“Giglampz”という記事がある。「大めがね」を意味する表題は、ハーンが友人の画家と共同編集していた実在の週刊誌の名前で

ある。わずか9週間の短命に終わった同誌の創刊から廃刊までの顛末を自嘲交じりのユーモラスなトーンで振り返ったこの記事が重要なのは、そこでハーンが自身のセンセーショナルリズムに言及しているからである。

Now, in those days there was a young man [Hearn] connected with the Daily Enquirer whose taste were whimsically grotesque and arabesque. He was by nature a fervent admirer of extremes. He believed only in the Revoltingly Horrible or Excruciatingly Beautiful. He worshiped the French school of sensation, and reveled in thrusting a reeking mixture of bones, blood and hair under people's noses at breakfast time. To produce qualms in the stomachs of other people afford him especial delight [. . .]. He was only known to fame by the name of "The Ghoul." (16) ⁸

「朝食を取っている人々の鼻先に、骨や血や毛髪の混じった悪臭紛々たるものを突きつけることに耽溺していた」(reveled in thrusting a reeking mixture of bones, blood and hair under people's noses at breakfast time)、「墓をあばく悪鬼「グール」という名で有名になっていた」(He was only known to fame by the name of "The Ghoul.")と、戯画的に述べているが、事実、ハーンは読者が普段目をそらしているシンシナティ社会の暗部を明るみに出すような記事でこそ本領を発揮した。その顕著な例として、1874年5月3日掲載の“The Dance of Death”と、同年7月26日掲載の“Les Chiffonniers”がまず挙げられる。

“The Dance of Death”は医大の解剖室を巡り、「そこで遭遇するであろう魅力ある光景と臭い」(attractiveness of the sights and odors therein to be encountered. 130) ⁹を伝えることを目的としている。ミイラや頭蓋骨、薬液に浮かぶ胎児の頭といった展示物の洗礼を受けてから、ハーンは「屠畜場」(a butcher's shop 133)を連想させる解剖室に足を踏み入れる。案内人が解剖台の覆いをめくると、そこには「例のもの」(“subjects” 133)が横たわっていた。

A pile of human bones, sinews, nerves and arteries, black with encrusted

blood, and smelling with a smell indescribably abominable. The bones of the trunk still held together with rotting shreds of flesh; a few scraggy atoms dangled from the freshly scraped ribs; and the spinal column was streaked at intervals with green splotches of decay, looking like a huge and disgusting centipede of some pre-Adamite age. (133)

腐った肉によってまだ繋がりを保っている胴体の骨や、肋骨からぶら下がる肉片など、無残な死体の詳細がはばかりなく伝えられる。とくに、腐りかけた脊柱が「ところどころ緑色に変色し、忌まわしい太古のムカデのような縞模様になっている」(streaked at intervals with green splotches of decay, looking like a huge and disgusting centipede of some pre-Adamite age) という比喻には実際に目にした者にしか書けないような独自性・具体性がある。

部屋を移ったハーンは、当初の目的である若い娘の遺体と対面する。案内人が素晴らしい体 (Splendid physique. 129) だったと語る彼女も、「今や血のこびりついた肉塊と黒ずんだ骨」(that frightful mass of bleeding flesh and blackened bone. 135) と化しており、片足には、「なお黒い皮膚を被った干からびた肉がくっついていた」(one leg was still incased in shrunken flesh, covered with black leathery skin. 136)。

この記事の狙いは、遺体の様子を恐れおののき、生前の姿に思いを馳せて感傷的になるハーンとの対比により、解剖人の世間離れた感覚を皮肉なことにすると読めるが、真価はやはり、生々しい遺体の描写そのものである。

“Les Chiffonniers” は、屑商と屑拾いを取材した記事である。屑商へのインタビューを通して、取り扱う廃物の種類や、廃物による値段の違い、何人かの屑拾いのプロフィールなど、知られざる業界の実態が明らかにされるが、ここでも読み所は、ごみ山とそこで働く屑拾いたちの描写である。ハーンによると、ごみ山は、「陰気な工場に囲まれた人気のない不潔な荒野であり、汚れた骨と廃物に満ちたゴルゴダの丘さながらである」(A wilderness of filthy desolation walled in dismal factories; a Golgotha of foul bones and refuse, 59)¹⁰。さらに不気味なのは、そこでごみを拾う人々の姿である。

Clad in rags fouler than those they unearthed from the decaying filth beneath them, the dump-pickers worked silently side by side, with a noiseless swiftness that seemed goblin-like to one coming upon such a scene for the first time. At a greater distance these miserable creatures, crawling over the dumps on all fours, looked, in their ash-colored garments, like those insects born of decay, which take the hue of the material they feed upon. (59-60)

ハーンが見た屑拾いたち (dump-pickers) は人間というよりも、汚物の山をせかせか這い回る不気味な「小妖精」(goblin-like) である。灰色の着物をまとった彼らが「腐敗の中から生まれ、食っているものの色をそのまま体に表す昆虫のようである」(like those insects born of decay, which take the hue of the material they feed upon) という比喻には、解剖室で目にした「ムカデのような縞模様」に変色した骨にひけをとらない不快さがある。

単身シンシナティに渡ってきたハーンが極貧生活を余儀なくされたことは、伝記やハーン自身の書簡などがすでに指摘するところである。まともな家もなく、職を転々とするその日暮らしの辛さを骨身に染みてわかっていたハーンだからこそ、普通なら目をそむけたいような社会の暗部に平然と飛び込み、臨場感と説得力のある記事を書くことができた。¹¹しかし、その記事の本領は、一般的なジャーナリズムに期待されるように、事実を正確かつ公正に記録したり、それによって社会悪を糾弾したりすることにあるのではない。“The Dance of Death” と “Les Chiffonniers” のグロテスクな比喻が示しているように、ハーンのセンセーショナルリズムを生み出しているのは、ショッキングな題材の克明な描写というよりも、事実を主観で大胆に潤色するそのやり方であるのは明らかだ。

上記 2 作でハーンが見せたセンセーショナルリズム、本人の言葉を借りてより具体的に言うならば、朝食中の読者の鼻先に汚物を突きつけるようなセンセーショナルリズムは、“Tan-Yard Murder Story” でさらに過激になる。

III “Tan-Yard Murder Story” のセンセーショナルリズム

1874年11月9日掲載の“Tan-Yard Murder Story”（原題“Violent Cremation”）はそのタイトルと、前掲したスティーヴンスンの「センセイショナル」という言葉からも窺えるとおり、シンシナティの皮革製作所で起こった凄惨な殺人事件を生々しく伝えた記事である。

被害者はフライベルク皮革製作所に雇われている25歳のドイツ人青年ヘルマン・シリング。主な容疑者は43歳の下宿経営者アンドレアス・エーグナーと、その息子フレデリック・エーグナー、そして、シリングに仕事を奪われたことで個人的な恨みを抱いているとされるジョージ・ルーファアの3人である。かつてシリングは工場のすぐ隣でエーグナーが経営する下宿屋を利用していた。しかし大胆にも、そこでエーグナーの15歳のであるジュリアと密通を繰り返し、彼女と寝室にいるところを見つかってしまう。シリングは逃亡し、ひとまずは事なきを得たものの、やがてジュリアの妊娠が発覚。不運なことに、彼女は病気のために妊娠7ヶ月で死んでしまう。

後日、シリングは皮革製作所で働いているところを怒り狂ったエーグナー父子に襲われるが、居合わせた人の仲裁で一命を取りとめた。今度はシリングが暴行罪で訴え、結果、有罪宣告を受けたエーグナー父子はシリングに対して治療費その他の支払いを命じられる。事件はこれでおさまるところか、エーグナー父子の怒りはさらに燃え上がり、父親は自身が経営する酒場で、必ずやシリングを殺してやると何度も息巻いた。

エーグナー家との諍いの結果、下宿屋を出たシリングは皮革製作所内の小屋に寝泊りしていたが、ある夜、夕食を終えてそこに帰ってきた直後に惨殺されてしまう。

以上の入り組んだ顛末に加え、ハーンは惨劇の舞台となった小屋の内装や、犯行に使われた炉の形状、エーグナー父子逮捕の決め手となった状況証拠を手際良く解説している。しかし、この記事は事実を淡々と報じるだけではない。真骨頂は、読者の興味を煽るための作為的な筆運びと、度を過ぎた遺体の描写にある。

まず、シリングが殺された夜、現場である製作所の厩舎の近くで、「首を絞

められた男のゼイゼイという音」(the gurgling noise of the strangling man, 32)¹²と、「何物かが引き摺られていくような物音」(a dragging noise, 32)を聞いたという男の証言が紹介される。翌朝、その男と彼の友人が厩舎の中で、「血糊と髪の毛とがべつとりと付着した」(smearred with blood and hair, 33)ピッチフォークを発見する。血痕は厩舎を出て、焼却炉がある部屋の入口で途絶えており、二人は最悪の結果を悟る。まもなく警官が到着し、ここでようやく、「被害者の惨殺体が爐の中へ投げ込まれた」(the body of the murdered man had been thrown into the furnace, 33)と書かれる。

検死に同席したハーンは黒焦げの死体を事細かに描写する。「焼けた牛肉の臭気にすこぶる類似するが、それ以上に重たく不快な、強烈な臭い」(odor, strongly resembling with the smell of burn beef, yet heavier and fouler, 34)、「半焦げの腱」(half burnt sinews, 35)、「半ば溶けた肉」(half-molten flesh, 35)、「沸騰した脳髓」(boiled brains, 35)、「砲弾のごとく爆裂した頭蓋骨」(The skull had burst like a shell, 35)。臭いと見た目だけではなく、直接触れて死体の惨状を伝える箇所は、この記事のハイライトである。

The brain had all boiled away, save a small wasted lump at the base of the skull about the size of a lemon. It was crisped and still warm to the touch. On pushing the finger through the crisp, the interior felt about the consistency of banana fruit, and the yellow fibers seemed to writhe like worms in the Corner's hands. (35)

「レモンほどの大きさ」(about the size of a lemon)になった脳漿の焼け残りは触れるとまだ温かく、指を突っ込むと「バナナの果実程度の濃度が感じられ」(the interior felt about the consistency of banana fruit)、黄色い繊維質が検死官の両手の中で「蛆虫のごとく蠢いてるように見えた」(writhe like worms)と書くハーンは、まぎれもなくセンセーショナルな記者だった。

この凄惨な描写のあとで、最も恐ろしい疑問が提示される。被害者はピッチフォークで撲殺されてから炉に放り込まれたのか、それとも、まだ息があるうちに放り込まれたのか。ハーンは後者であろうと言う。

Perhaps, stunned and disabled by the murderous blow of his assailants, the unconscious body of the poor German was forced into the furnace. Perhaps the thrust of the assassin's pitchfork, wedging him still further into the fiery hall, or perhaps the first agony of burning when his bloody garments took fire, revived him to meet the death of flame. Fancy the shrieks for mercy, the mad expostulation, the frightful fight for life, the superhuman struggles for existence—a century of agony crowded into a moment—the shrieks growing feebler—the desperate struggles dying into feeble writhings. And through all the grim murderers, demoniacally pitiless, devilishly desperate, gasping with their exertions to destroy a poor human life, looking on in silent triumph! Peering into the furnace until the skull exploded and the steaming body burst, and the fiery flue hissed like a hundred snakes! (36)

衣服に燃え移った炎によって目を覚ました被害者は、狂ったように絶叫し、もがき、命乞いをする (the shrieks for mercy, the mad expostulation, the frightful fight for life)。その苦しみは、「百年の苦痛苦悶が一瞬の断末魔の中に群がりおこる」(a century of agony crowded into a moment)と形容される。一方、殺人犯たちは、「鬼のごとく無慈悲に」(demoniacally pitiless、「悪魔のごとく暴戾に」(devilishly desperate)、自分たちの仇敵が生きたまま焼かれていく様を覗き込み、「無言の凱歌」(silent triumph)をあげる。最後に読者は彼らの視点に立たされ、業火の中ではじける頭蓋骨と、蒸気とともに破裂する体を見せつけられる。

ここで注意しなければいけないのは、ハーン本人が断りを添えているように、この時点では犯人は殺害の実態についてまだ詳しいことは語っておらず、被害者が生きたまま炉に放り込まれた確証はないということである。引用文中に繰り返される“perhaps”が示すとおり、被害者が業火に悶え苦しむ様も、血も涙もない殺人犯の所業も、言ってしまうと、すべてハーンの勝手な想像にすぎない。

ほぼ一週間後の 1874 年 11 月 15 日に掲載された “The Quarter of

Shambles”は、“Tan-Yard Murder Story”の副産物あるいは補遺とでも言える記事であり、続けて読んでおく必要がある。「事件があった界限に集まる仕事はすべて、それに携わる人間を強健かつ野蛮にする」(It is the center of all those trade which harden and brutalize the men who engage in them. 67)、¹³「溝には汚物と血が流れている」(Its gutters run with ordure and blood; 67)、「死と腐敗と家畜の汚物」(death and decay and animal filth, 67)でよんだ空気が、「大昔の大虐殺を思わせる不快な煙のように一体を覆っている」(like the sickly smoke of ancient holocaust, 67)というふうに、冒頭から不潔で陰鬱な描写が続く。

現場となった皮革製作所周辺を伝える箇所では、さらにその度合いが強くなる。

It [the neighborhood of the tannery] is wholly deserted, darksome desolate; and the stench which pervades its narrow streets suggests only the decay of death. You may walk upon the broken and filthy pavements for squares and squares without seeing any light but that of the street-lamps that gleam like yellow goblin eyes, or hearing the footstep of a human being. The ghoulish grunting of hogs awaiting slaughter, the deep barking of ferocious tannery dogs, the snakish hissings of steam in rendering establishments, and the gurgling, like a continuous death-rattle, of black and poisonously-foul gutter streams alone break the deathly silence. (69)

「ゴブリンの黄色い目のような街灯の光」(the street-lamps that gleam like yellow goblin eyes) や、「断末魔の叫びのような音を立てて流れる、毒々しく汚れた溝」といった比喩に加え、“deserted, darksome, desolate”、“decay of death”、“ghoulish grunting”など執拗な繰り返しからも、意図的に読者の不快感を煽ろうとしているのは一目瞭然である。なお、蒸気のシューという音を蛇にたとえているのは (the snakish hissings of steam)、“Tan-Yard Murder Story”からの前掲引用文中で、被害者を焼く炎の音を蛇にたとえてい

たのと同じである (the fiery flue hissed like a hundred snakes!)

悪夢のような路地に響く犬の鳴き声により、ハーンの恐ろしい空想がさらにかき立てられる。

How they [the dogs] could have been quieted while that hideous tragedy was being enacted — hearing the dull, skull-crushing blows; the death-struggle; the shrieks for aid; the body dragged from the stable to the furnace, leaving its blood-trail behind; the strangely horrible crackling and spluttering and hissing within the furnace, is something very difficult to comprehend. (70)

事件の夜にどうして製作所の犬は吠えなかったのかという疑問を口実に、ハーンはシリング青年の死に様——頭を砕く鈍い音、命乞いをする声、血の痕を残して焼却炉まで引き摺られていく体、それを飲み込んで爆ぜる炎——をまたしても描く。“The Quarter of Shambles”は殺害現場周辺の雰囲気伝えてはいるが、客観的な報道記事からはほど遠く、作者の主観によって大きく歪められている。

娘を辱められた父子の凄惨な復讐劇という素材だけですでに十分扇情的な事件を取材した記事 (“The Quarter of Shambles”も含む)において、ハーンは自らの手で触れた焼死体の感触を伝えるばかりか、事実との齟齬も省みない過剰かつ執拗な空想でさらに潤色した。これが、“Tan-Yard Murder Story”のセンセーショナルリズムの実態である。

おわりに

ハーンが勤め出した頃の *Cincinnati Enquirer* は転換期にあった。良くも悪くも堅実だった地方紙がセンセーショナルリズムを打ち出し、他紙との勝負に出たのである。¹⁴本稿で取り上げた記事を見ると、駆け出しのハーンも彼なりのセンセーショナルリズム、つまり、「朝食を取っている人々の鼻先に、骨や血や毛髪の混じった悪臭紛々たるものを突きつける」センセーショナルリズムでその方針に応える仕事をしていたといえる。その努力は “Tan-Yard Murder Story”

の大成功によってひとまず報われるが、その後もよく似た趣向の記事を書き続けたことは、今回利用したアンソロジー収録の記事にざっと目を通しただけでもわかる。

Enquirer の次の勤め先である *Cincinnati Commercial* に書いた “Haceldama” (1875年9月5日) では、ユダヤ人屠畜業者の洗練された屠畜術を取材し、実際に飲んだ牛の生き血の風味を伝えている。¹⁵1875年10月13日掲載の “Balm of Gilead” は肥料製造工場が発する耐え難い臭気の原因を探ることを目的に書いた記事であり、さまざまな動物の死骸がボイラーに投入されて肥料と油脂に加工されていく過程や、吐き気を催させるようなソーセージの皮の作り方など、読者の知らない工場の内実を紹介している。¹⁶ハーンのセンセーショナルリズムは、仕事のためと割り切った一過性のものではなく、時間をかけて身につけた一つの作風として評価すべきものである。

今後の研究では、記者時代のハーンのセンセーショナルリズムの実態と意義についてさらに細かく分析するとともに、作家になってからの作品への接続可能性なども探っていきたい。¹⁷

注

1. ハーンのシンシナティでの活動についての詳細な研究である田中欣二「シンシナティ時代のラフカディオ・ハーン」によると、ハーンは1869年に8月14日にロンドンを出港した汽船セラ号に乗り、同年9月2日にひとまずニューヨークへ上陸するが、ニューヨークでの滞在期間については諸説ある (pp. 148-149)。したがって、シンシナティに到着した正確な日も定かではない。
2. *Cincinnati Enquirer* 紙の記者になる以前、1870年の2月から1871年の3月までの間に、*The Merchants' and Manufactures' Bulletin* と *The Boston Investigator* に投稿していたと推定・鑑定されている (田中 p. 155)。
3. 『小泉八雲事典』(恒文社、2000年)によると、モデルは1885年生まれ、没年不詳、「ペンシルヴェニア州フィラデルフィア市に住む法律家で新聞資料の収集家として知られるが、詳細は不明」(p.635)。
4. “Tan-Yard Murder Story” というタイトルは、モデルが *An American Miscellany* に収録する際につけた。本稿でもこちらを使う。
5. これらはハーンが *Cincinnati Enquirer* に書いた記事のごく一部である。小泉凡・銭本健

二作成の「ラフカディオ・ハーン年譜」によると、ハーンが同紙に書いた記事の数は、1872年11月から73年までで78篇、74年は130篇、75年6月までで45篇、合計253篇である(p.563)。それよりも新しい研究である上記の田中の論文ではさらに整理され、1872年から75年までで合計300は越えることが明らかにされている(p.165)。しかし、その中には単行本未収録の記事も数多くあるので、当時のハーンの全貌を明らかにするためには、まだまだ調査・研究の余地がある。

6. ハーンの初期の記事のおおよその傾向について、田中は次のように分析している。「記者になる前の作品や、常勤記者になるまでのハーンの寄稿記事には、聖書に関するものや、神や科学についての見解、文学的な評論など、まじめなものが多かった」(p.158)。シンシナティ社会に溶け込んでいくに従い、社会的弱者・少数派を取材した記事で力を発揮し始めた。
7. 日本語訳は、E・スティーヴンスン著・遠田勝訳『評伝ラフカディオ・ハーン』による。以下、とくに断りが無い限り、本文中のカッコ内の数字はすべて引用ページを示す。同記事の成功については、O. W. フロスト著・西村六郎訳『若き日のラフカディオ・ハーン』でも触れられている。『インクワイアラー』は競争紙を出し抜いていた。国中の日刊紙がハーンの記事を引用していた。彼の給料は上がり、彼の地方での名声は確立した。彼がシンシナティにとどまっていた間、仲間の探訪記者たちは彼を指すのに『インクワイアラー』紙のために『なめし皮工場殺人事件』を書いたハーン」と読んだのだった(pp.143-144)。
8. Albert Mordell 編の *An American Miscellany Vol. I* 収録の版による。日本語訳は池田美紀子訳「大めがね」による。
9. 西崎一郎編の *New Radiance and Other Scientific Sketches* 収録の版による。日本語訳は秦駿一訳「死の舞踏」による。
10. 西崎一郎編の *Barbarous Barbers and Other Stories* 収録の版による。日本語訳は中田賢次訳「肩拾い」による。
11. たとえば、後年になって異母妹に宛てた手紙の中で、家賃が払えなかったために下宿者を追い出され、道で寝たこと、電報配達、下宿屋の下男などの仕事をして食いつないでいたことを明かしている(E・スティーヴンスン『評伝ラフカディオ・ハーン』p.55)。その他、小泉凡・銭本健二「ラフカディオ・ハーン年譜」pp.559-560、田中欣二「シンシナティ時代のラフカディオ・ハーン」p.159等を参照。
12. Albert Mordell 編の *American Miscellany Vol. I* 収録の版による。日本語訳は平川祐弘訳「皮革製作所殺人事件」による。
13. Albert Mordell 編の *Occidental Gleanings Vol. I* 収録の版による。
14. 小泉凡・銭本健二「ラフカディオ・ハーン年譜」p.563、田中欣二「シンシナティ時代のラフカディオ・ハーン」pp.156-157を参照。
15. シンシナティのユダヤ人の屠畜術については、1873年11月9日付 *Enquirer* 掲載の

“The Hebrews of Cincinnati”の一部でも紹介しており、長い間関心を寄せていたことがわかる。

16. 記事中でハーンは工場の臭いと屠畜場の臭いとを比較しており、それが前掲の“Haceldama”での実体験に基づくものなのかどうかは明らかではないが、これまでの取材とのつながりを窺わせる箇所である。「工場の臭いは平均的な屠畜場の臭いほどきつくはないと主張する人もいる。しかし、それは明らかに間違いである。新鮮な血と内臓が発する悪臭と、腐敗物が発するひどい臭いとは全くの別物である」(It is contended by some that the odor is no worse than that of the average slaughter-house; but this is obviously untrue, for the reeking odors of fresh blood and entrails have nothing in common with the abominable exhalations of putridity. p.103)
17. 今回取り上げたようなセンセーショナルリズムは日本時代の作品では影をひそめるが、完全に消えたというわけではない。たとえば、*A Japanese Miscellany* (1901年)収録の“Of a Promise Broken”における、若妻の首を切って惨殺した亡霊の描写。「しかし肉の落ちつくした右の手は、手首から離れながら、なおまさぐり、その指は、黄色い蟹の鉗が落ちた果実をしっかりと掴んで話すまいとするように、ずたずたに裂かれた血まみれの首を、しっかりと握っていた」(But the fleshless right hand, though parted from the wrist, still writhed; — and its fingers still gripped at the bleeding head — and tore, and mangled — as the claws of the yellow crab cling fast to a fallen fruit. . . . p.207)。原文は *The Writings of Lafcadio Hearn Vol. 10* 収録の版による。日本語訳は池田美紀子訳「破られた約束」による。

引用・参考文献

- Hearn, Lafcadio. “Balm of Gilead.” *Occidental Gleanings Vol. 1*. Ed. Albert Mordell. New York: Books for Libraries Press, 1967.
- . “Giglampz.” *An American Miscellany Vol. 1*. Ed. Albert Mordell. New York: Dodd, Mead and Company, 1924.
- . “Haceldama.” *Occidental Gleanings Vol. 1*. Ed. Albert Mordell. New York: Books for Libraries Press, 1967.
- . “Les Chiffonniers.” *Barbarous Barbers and Other Stories*. Ed. Ichiro Nishizaki. Tokyo: Hokuseido, 1939.
- . “Of a Promise Broken.” *The Writings of Lafcadio Hearn Vol. 10*. Boston: Houghton Mifflin, 1922.
- . *Period of the Gruesome*. Ed. John Christopher Hughes. Lanham: UP of America, 1990.

- . "Tan-Yard Murder Story." *American Miscellany Vol. 1*. Ed. Albert Mordell. New York: Dodd, Mead and Company, 1924.
- . "The Dance of Death." *New Radiance and Other Scientific Sketches*. Ed. Ichiro Nishizaki. Tokyo: Hokuseido, 1939.
- . "The Hebrews of Cincinnati." *Barbarous Barbers and Other Stories*. Ed. Ichiro Nishizaki. Tokyo: Hokuseido, 1939.
- . "The Quarter of Shambles." *Occidental Gleanings Vol. 1*. Ed. Albert Mordell. New York: Books for Libraries Press, 1967.
- 小泉凡・銭本健二「ラフカディオ・ハーン年譜」. 『ラフカディオ・ハーン著作集第15巻』 斉藤正二他編訳. 恒文社, 1988年.
- 小泉八雲「破られた約束」池田美紀子訳. 『怪談・奇談』 平川祐弘編. 講談社, 1990年.
- 田中欣二「シンシナティ時代のラフカディオ・ハーン」. 『講座小泉八雲 I ハーンの人と周辺』 平川祐弘・牧野陽子編. 新曜社, 2009年.
- ハーン, ラフカディオ. 「大めがね」池田美紀子訳. 『ラフカディオ・ハーン著作集第1巻』 平川祐弘他編訳. 恒文社, 1980年.
- . 「屑拾い」中田賢次訳. 『ラフカディオ・ハーン著作集第2巻』 森亮他編訳. 恒文社, 1988年.
- . 「死の舞踏」秦峻一訳. 『ラフカディオ・ハーン著作集第2巻』 森亮他編訳. 恒文社, 1988年.
- . 「皮革製作所殺人事件」平川祐弘訳. 『ラフカディオ・ハーン著作集第1巻』 平川祐弘他編訳. 恒文社, 1980年.
- フロスト, O. W. 『若き日のラフカディオ・ハーン』 西村六郎訳. みずが書房, 2003年.